

20. アメリカ在住体験記 総まとめ

1984年、NASAでの業務が国家機密情報使用許可（Secret Clearance）を必要とした為、私はその条件の一つであるアメリカ市民権を取得した。既に保持していた永住権が市民権に代わっただけであったが、参政権が与えられた。参政権とは公選選挙権と公選候補出馬権の事である。私はアメリカ市民権を有する日本人になった。これを一世（First Generation）と云う。別名、帰化人と云うが、アメリカでは単に Japanese American と云う。民族的にアメリカ人になったわけでもなく、権利・義務的にアメリカ市民になったのである。むしろ便宜的（職務上必要であったから）な市民権獲得と云うべきなのだが、アメリカに在住する多くの外国人にとっては市民権の獲得は夢の上の夢でもあるのだ。これによって私は地方行政から国家レベルまでの公選職に出馬出来、且つアメリカ大統領選挙にも直接投票出来る事になった。しかし裁判における陪審員（裁判員）の義務が生じた。永住権を有する外国人は参政権と陪審員義務がないだけで、あとの全ては他の市民と何ら変わるところはない。永住権とはアメリカに永久に在住する権利があるだけの事であり、又それは憲法の定めるところでもあり、例外はないし、日本の様に怪しげな最高裁の付記もない。

アメリカに住む永住権者は一日も早く市民権を取得しようとしている。彼らは市民権を取得して、それから得られる権利よりも他の市民と同様に義務を果たしたいと願っているのである。又、そこには長年待った挙句の果てに勝ち得た資格としての誇りでもあるのだ。日本にはおよそ120万の外国人が在住しており、少なくともその半数の60万人は日本国籍取得資格を有しながら、取得の意思がなく、しかしながら参政権を要求するとの報道に私は首をかしげている。アメリカの永住権者と比較すると実に対照的である。

日本に永久に住んでいる外国人は、国籍がないのは不便至極であるし、進学、就職にかなりの制約を受ける事も必至、なぜ日本国籍を取得しないのか、私には解せない。又、日本のある地方行政地域で永住権を有する外国人（外国人登録をしている）に参政権を与えている報道に私は驚いて言葉が出ない。たとえそれが良識に基づいた行政的判断であるとしても憲法と諸々の法律が先行すべきである。ここで関連ニュースを紹介したい。

2008年、カリフォルニア州のある市の市長選でヒスパニック系の女性が市長に当選した。彼女は英語は勿論の事、スペイン語が話せる。この市はヒスパニック系の市民が多く、新市長に託される公共政策に多くの期待が寄せられた。しかし後日判明した事は彼女はアメリカ市民権を有していなかったのだ。その為、彼女は市長職を降りなければならなかった。本人は幼少の時からアメリカ在住で、社会保障番号も持っており、市長選に出馬するにあたり、市民権有無に関して全く関与しなかったからである。原因は彼女が幼少の時にメキシコから両親が彼女を連れて越境し、そのままアメリカに住みついた事にさかのぼる。現在では子供が学校に入学する時は出生証明あるいはパスポートが必要だが、当時は必要としなかったのであろう。親の責任と云えばそれまでの話であるが、この事実は多くの不法在住移民に問題を投げかけたのである。

私の 43 年に渡るアメリカ在住期間中には様々な経験をして来たのは事実である、しかし、これはアメリカ市民として考える時、さほど特記すべき事でもない。しかし外国語である英語を恥もなく振りかざし、何事にも恐れる事もなくやってこられたのはやはり自分の中に深く潜在していた大和魂、あるいは道産子魂のなにもものでもなかったと思っている。日本人としての誇りは何時も忘れないで生きて来たと確信している。アメリカ市民権を取得した後も決してアメリカ人振りはしなかった。丁度日本国籍を取得した外国人が、『私は日本人ではありませんが、国籍を頂いた日本に在住する外国人として、誇りをもって日本の皆様方と共に歩みます！』と言うのと同じであった。

国籍とは無関係であるが、許せない事件が起こった。それはアメリカの南部の州で数年前に起こった事件で、日本から Home Stay プログラムで来ていた日本人学生が射殺された事件であった。私は事件の Progress に異常な程に注目した。それは私とて元は日本人留学生として南部に在住していたのとアメリカ諸州の銃砲所持法に疑問を持っていたからであった。事件は Halloween Night の最中、英語の未だ良く分からない、Halloween 仮装をした日本人高校生に『そこを動くな！』と言う言葉に従わなかったとして、Halloween Party 宅の隣家の主がライフル銃を発砲したのである。その隣家の主はリストラで職業を失い、憂鬱な毎日を過ごしていた矢先の不幸なる事件だったと報道された。

裁判の結果であるが、陪審員たちは『無罪』の判決を下した。理由は正当防衛。冗談ではない。無防備の学生を射殺して、しかも Halloween 仮装の横行する夜なのだ。この学生が暴力行動に出たのならまだしも、ただ近寄って来ただけの事で殺人を犯し、正当防衛が成立するアメリカ、私は唾然となった。私はとっさにもしこの学生が白人だったら絶対に『無罪』にはならなかったと思った。リストラで職業を失っていた家の主、陪審員の同情心もあったにせよ、どう考えても正当防衛に達するまでにはかなりの積明的距離があったと私は思った。私は今でも思っているのではあるが、その夜、日本人学生でなくとも、誰でも良かったのではないかと思う。この主は自分の家に近づく者は誰にでも発砲しようと待ち構えていたのだと思う。ライフル銃は普通銃砲所持法に基づいてケースに入れて鍵をかけて保管していなければならなく、取り出すのには時間を要するからである。私がこの件の陪審員であったなら、『無罪』にはしなかったと確信している。

アメリカの共和党は銃砲所持規約法に反対している。理由は銃砲にからむ犯罪は銃砲が犯すのではなく人である、と主張する。故にそれに対抗し自分を守る為には銃砲所持は必至であると言うのだ。銃砲所持は開拓時代にさかのぼる。アメリカインディアンの襲撃に対抗する為の手段であった。銃砲所持はその時のなごりであるが、アメリカに土着した文化なのかも知れない。しかし、この近代文明時代にたとえ自己防衛としても銃砲所持は受け入れがたいと云うのが私の主観である。私は如何なる銃砲も登録し、如何なる弾丸にも ID なる番号を打つべきであると主張して来た。ちなみに、元レーガン大統領の妻、ナンシーは常時超小型ピストルを所持していた。

さて、アメリカ大統領の任期は 4 年である。再選すれば二期までの 8 年は君臨出来る。したがって再選されて二期目に入ると大統領は自己の主観を全うしようと試みるのである。次期大統領が誰になろうと余り考慮しない様だ。もし次期大統領を自分の政党から選出しようとするなら大多数（51%以上）の国民が支持するような国策を唱えるであろうが、その様な事はしない。ちなみに前ブッシュ大統領は世論の声を無視し、自己の主観である妊娠中絶不許可と人類細胞研究費削除の行政命令に捺印した。イラク国家の民主化の失敗で人気低迷中にこんな事を平然とやってのけた共和党のブッシュ大統領、アメリカ歴代大統領中最低の支持率を計上したのである。したがって次期大統領選挙での共和党の敗北は明白で、民主党から如何なる候補が、如何なるスローガンをもって出馬しても民主党候補の勝利は確実と予想された。結果としてその通りになった。私の主観ではあるが、オバマ大統領の勝利は彼が『白馬の騎士』的存在であったわけでもなく、スローガンの『Change』が功をなしたわけでもなく、たとえマニフェストが皆無であったにせよオバマ大統領は誕生した。賛否両論であるが、少なくともアメリカ大統領は次期選挙の人気票を考慮して政治を行なわないところが、例外はあるが、日本と違う。しかし日本の前麻生政権と前ブッシュ政権の支持率が世界の政治歴に残るほど低かったのは偶然であろうか？

私はアメリカの政治機構の中には派閥はない、と言った。私は又日本の政治機構の中で半ばやくざ組織的な派閥がある事を書いた。又、日本の政党は幹事長なる職が党構成に君臨し、政党公認候補の決定と選挙費用の配分、内閣大臣の指名等にも多大なる影響力を及ぼす。国会陳情はまず現政権下の幹事長に伺いを立てるべきと言っても過言ではない。アメリカの政界にはそんなワンマンはいない。しかしアメリカには日本の政治機構にないものがある。それはワシントンの国会法案に大きな影響を持つといわれる **Lobbyists**（院外活動家）と呼ばれる暗黙グループの存在である。彼らはワシントン政界有識者で議員間に知名度も高く、国会陳情は先ずは最適な **Lobbyist** を探す事から始めるべきだと言っても過言ではない。これも又、なかなか規制出来ない不合理なアメリカの政治体制でもある。彼らの所得は凄い、もの凄い。国会議員や弁護士よりも高い。先のトヨタ公聴会の件で考えたのではあるが、果たしてトヨタほどの **Lobbyist(s)** に当たったのであろうか。

又、アメリカの経済破綻は日本の経済破綻と続く。アメリカは日本をしのぐ負債大国でもあるのだ。アメリカを救っているのは連邦政府が発行する無税且つ膨大な国債だ。日本の国家予算もそれに負けじと国家予算の半分以上を国債で充当しようとしている。不必要と思われるマニフェストの数々、そこまでアメリカを真似る事はない。しかも現在の経済不況復興が遅れば、国民の税金負担となる事は必至であるからである。

アメリカと交渉するに当たって次を助言したい。アメリカは日本が朝鮮動乱の軍需で現在の経済大国の基礎を築いた事は周知である。日本国がアメリカとの防衛協定無しで、且つ自力で防衛が出来ない限り、アメリカへの軍事依存は避けられない。然るにアメリカへのペコペコ外交も避けられない。アメリカの大統領がたかがオリンピックの開催地の取得に出かけた。知名度もない日本の首相も急きょそれに従った。結局アメリカも日

本も敗退した。しかし、この機会を通して、首相はアメリカの大統領と少しでも個人的な親睦関係を作っておきたいと願っていたに違いないが、二人は会見する事すらなく、首相は手ぶらで帰国した。右に習え、実に『類は友を呼ぶ』そのもの、又はペコペコ外交の表れであると思うのは私一人であろうか。アメリカは義理を重んじない。アメリカの最懇親国イギリス、彼らのしがらみは何百年と続いているのだ。日本はイギリスにはなれない。

私が経験として述べて来たアメリカの合理主義が民主主義の決定版であるとは思わない。しかし日本は高度成長の下で裕福になり過ぎ、公金着服、収賄、年功序列、事なかれ主義、慣例主義が整然と往来し、日本列島の上にあぐらをかいている。その結果日本は不合理大国となってしまった。はたしてこれが日本独特の『倫理』あるいは『美德』であろうか。

私は星条旗が好きだった。そこには自由を勝ち取ったアメリカ人の血潮が流れているのが感じられるからである。しかし私は日本の国旗をこの上もなく愛してる。それは私の日本人としての魂の象徴であると感じるからである。卒業式にはもう国旗は掲げられなくなったとも聞く。何処へ行ったら我が国の、あの日の丸の国旗を仰ぎ見る事が出来るのであろうか。オリンピックの時だけのものなのであろうか.



長い間の皆様の拝読に感謝している。この体験記が何かの役に立てば幸いであります。特にこの機会を与えてくれた小樽ジャーナル、イデオロギーの差異を超越して頂いた事、小樽市を代表する Media としての立場を尊重し、敬意を表したい。

完